吉原源氏

夏吉日

夏吉

例言

本書は寶井其角の自筆戯著として世に名高く、遊女評書中の絶作と称せらる。今日世に傳へられあるは柳亭種彦自ら模寫せる三轉四轉のものなりといへば、當時已に得難稀書たるを察知すべく、編者の寡聞なる曾て傳本の世に存するものあるを聞かず。本書の由来に就ては疑問の諸点あれども未思せられたし。本書には駄字誤字及假名遣等の謬りあるも他に拠すべき良本なし、看者宜く其心して判讀せらんことを望む。

国立図書館所蔵本は一朝鐵蕉石十種中に收めあるも、之種彦の自筆模寫の本に據れるもの、由是又其師種彦の自筆本を模寫せるものなりといふ。

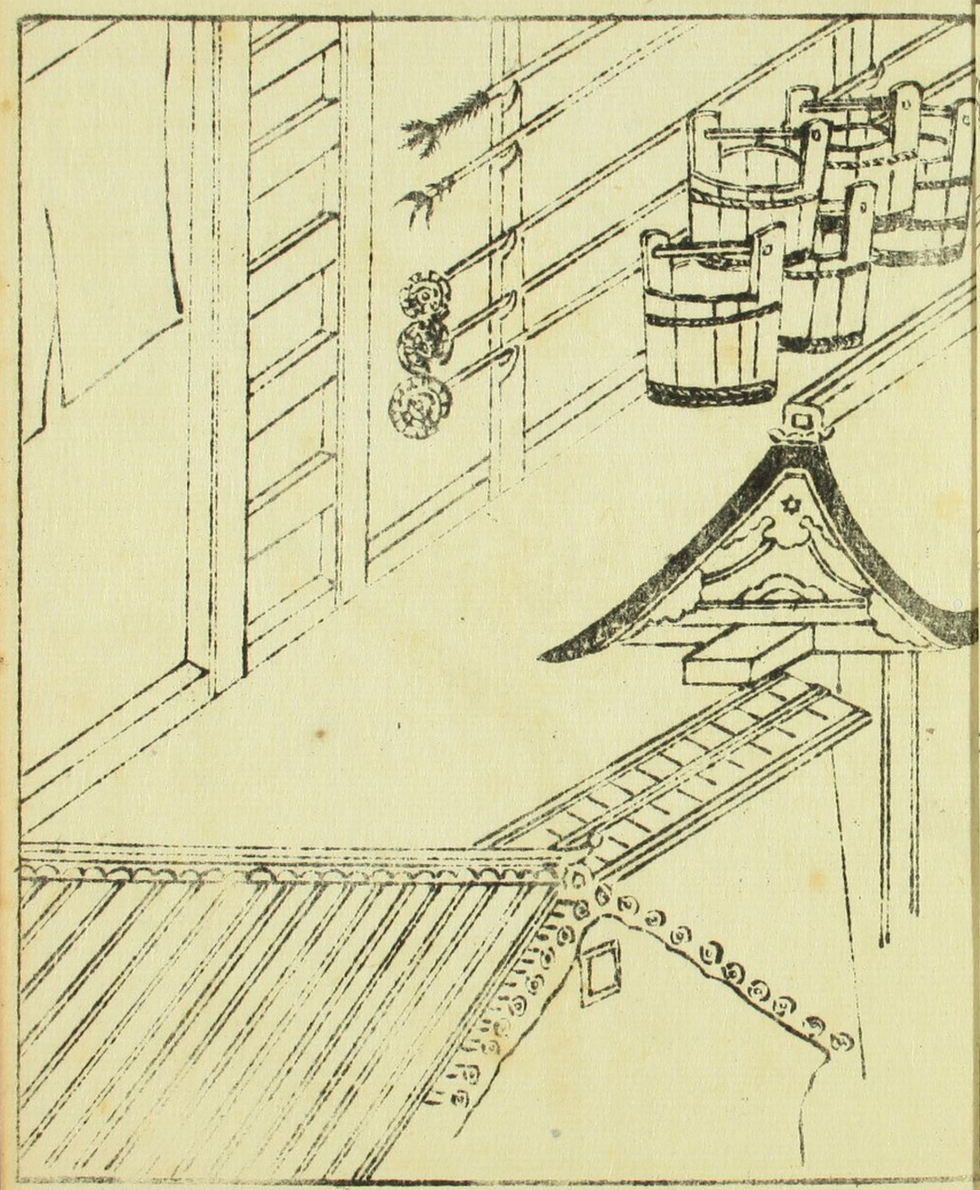
文庫之印

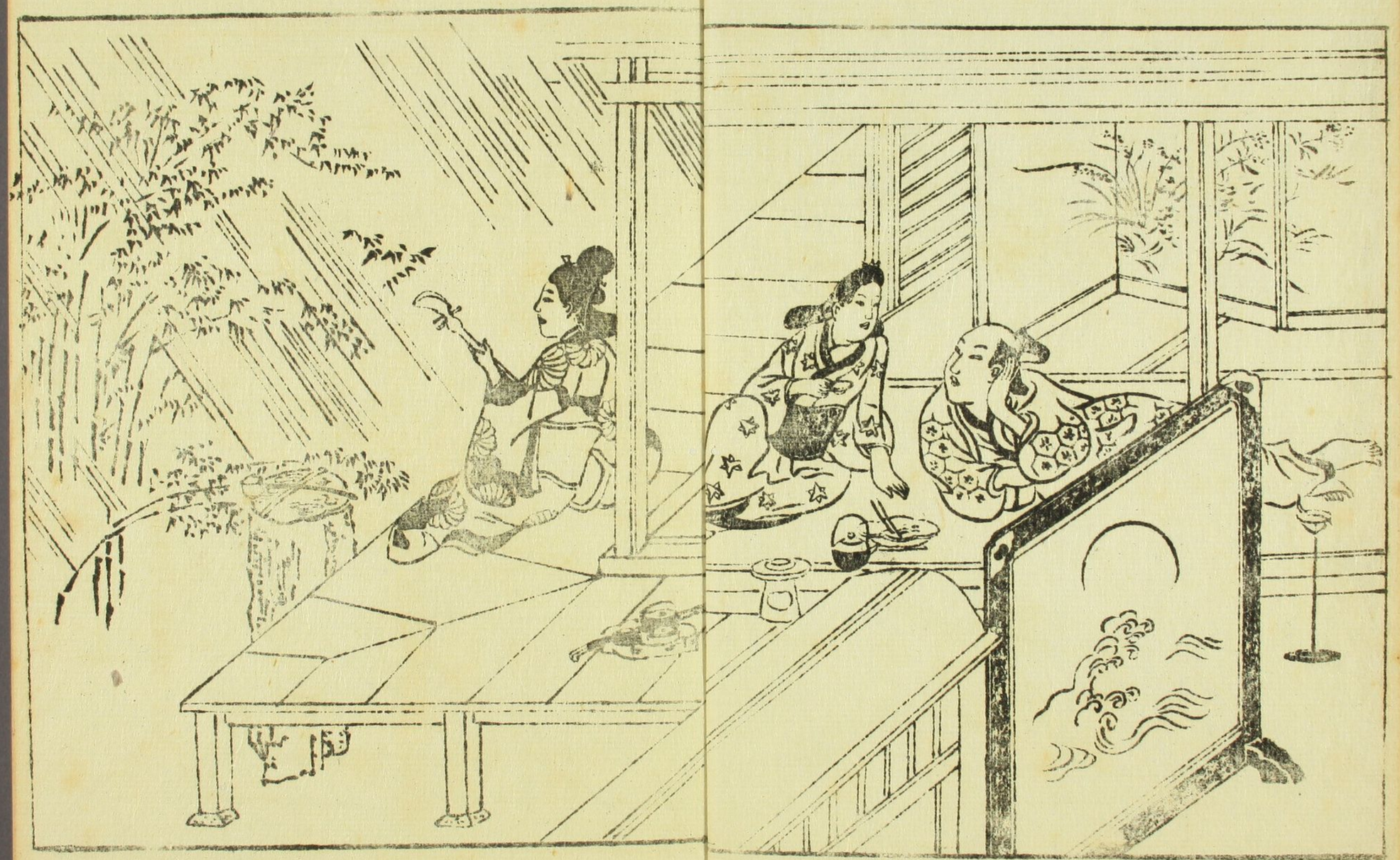
吉原傾氏第四君

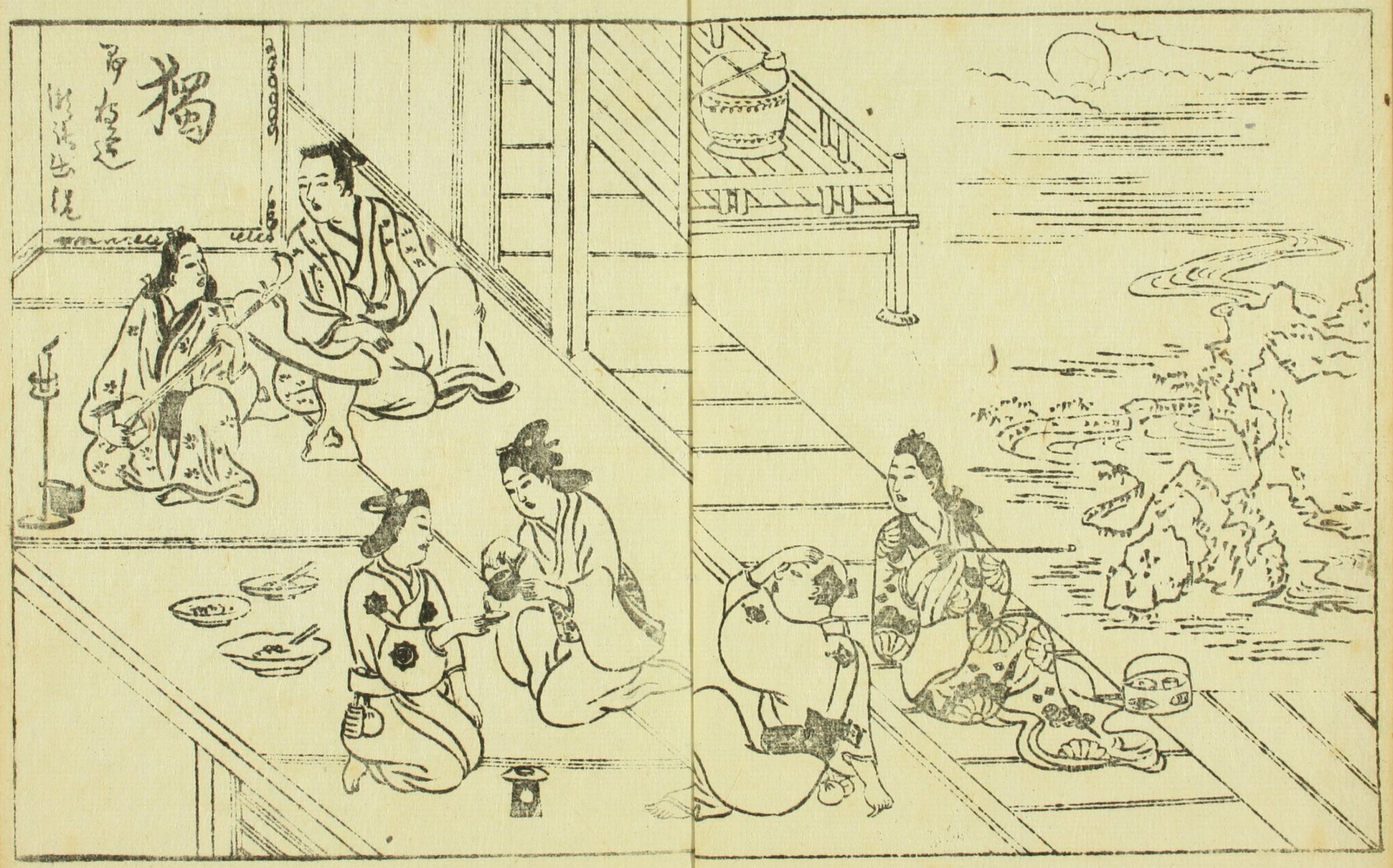
扉は實を写し出されまし
三才人は筆はとり給く
便りをいつはりつきゝ
あすの清き〳〵ゆへなれと
畫うちたせとも墨跡し
わけとかく人の絵にも筆四人
者の名をしもおまよふぬ

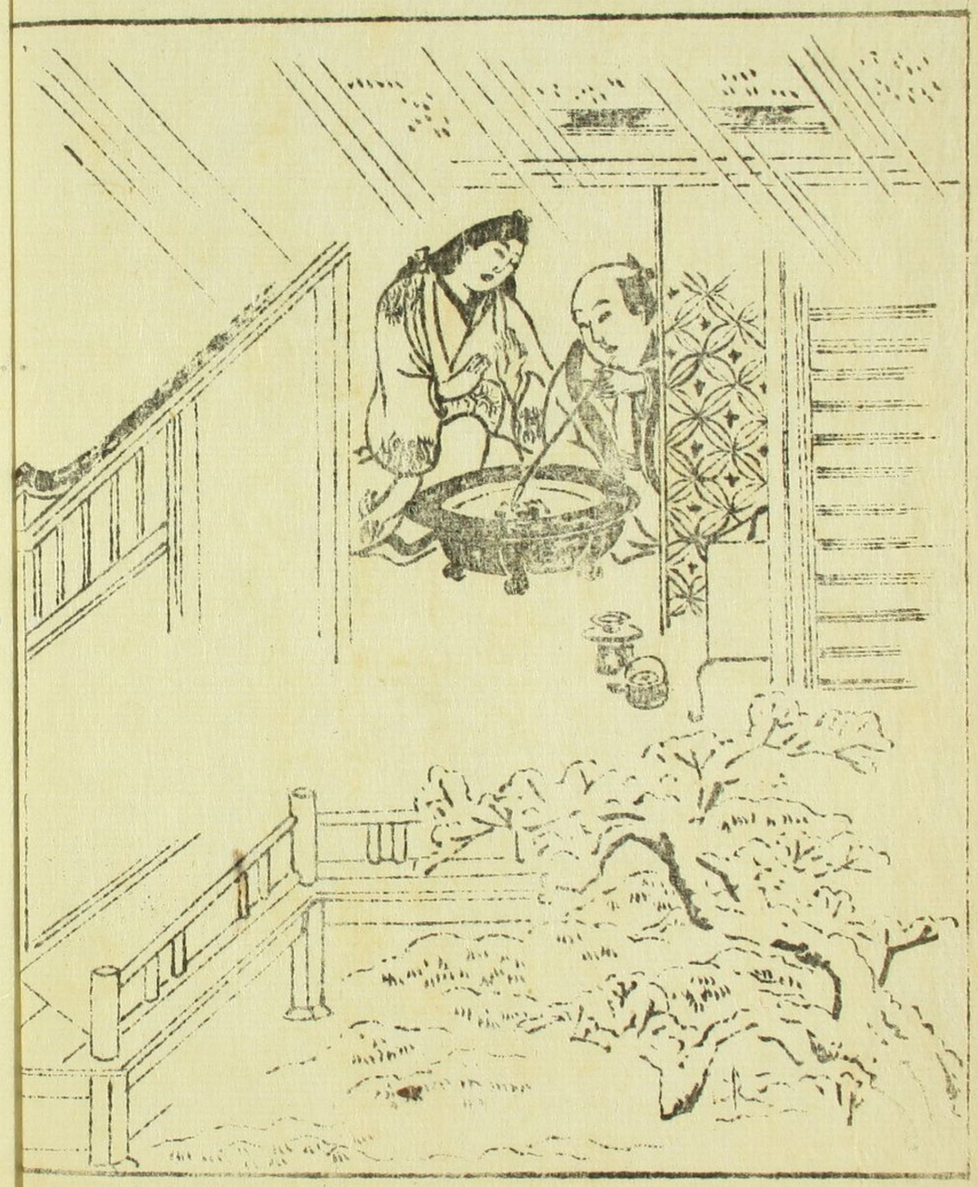
見る人のあはれかきをは
かくしゝ序といふやうなり
序まてなし人口を羅せ〳〵
まゐらす由おほせはあれ
いつきしの清卿様ありとか
什鶏しるく

浅茅の花






獨



吉原源八氏五十四君

梅紫

正月二日のあけぼのいとよりとさしたるすがたして春ハ
ゆかしのびやかなるはるの色もうつる紫いろへの
位ハ色あさはかなるもうつりかすみもうつりいと氣しるく
うつくしう新春著一てに新たなるのかをり
おのゝ風をもとゝのへ男のよいと風
乃かをりもゆゝしきまでハ相ひとゝのをゝ
うつくしくもうつくしくもひるゝ日かとゝ
とゝく泊かとゝいふとゝ泊かとゝ
きゝの色このむ氣をもとゝ
それもこゝかいつこゝんとゝ

はらからたちをうらしくおもひ毎とよみて
わなかつ心さなく詞すくなに物いひてとまりけて
一所の人をいとしかりきとのすゝ善悠和尚
人をしてひとつ乃くせハある物そ
この志さうハゆるしきものと獅子の説
氏のりぬひそめとしれはちやあるまき事とハ
もし事とさてハいてそとよせんいのまかされ
こやて乃三味ときして乃人家ときむかさきを
ゑゑてれこうの太きよ探幽の五人とかけて
元やみやと風流をえらむまとうくはられたと
やくらいをしたいやされてあまれとも代りて

近てんたりそれよりあつさの神餘とはるくハふりの
佐々木の盛さあつりるたされといふすし
近うてかへ所原新町のとうさゝ友くれ
も清施山のそこてそえてしあきかもれ附つはの
飛脚にてつけ志らせけれ
母も此りつくはれる老尼ありけるうて日そるる
むかさ此は昔さ爺のもとらしとて海ての親
よの所ていさくれ物のとそれてくはやりていふ
日金手く添すたりしつき盃のさらりかお
とりてそてちふあんてそうあさてこいあん心
おかめ忠おれらての分なるそのもりのと成
ぬさしあきかりしてうんさありしこのとて

のかゝる乱におりし人合せ侍るにかゝの詞は
此上京の人々をぬらして心にあらぬ悔こと
こそ世おしきことなるに合せてせうする孫
おすへかくなりし侍る

薄雲

正月言しつらしさらに為の楊柳の風にうつ
らつるとしもやあやめしくて哀しめんてい中自せきよし
かわらんでこのさ里やうら佳あるためいしの徒るぬえうり擢子ふ布
三の親ありと世にあやしのや侍り佳もと濡
の徒まいてぬ君とゝりされそていつまでか

満とみえつるし　かろうゝぬできそもむつさ紀は
らえ宝てるよし　わつかに正月さそいつか
一座より新御の所にて　きいのまろしあかれちいさ
かつさが大きな形女房になりて　あそしえたあし
けるをむつとせさて上臈いはれなくてもと古いさ
とへのよりを致一代やもおもはしくとこそかくされて
新御もめしぬ法にことひつのそよりとにくはを
けうておこそうとなりかぬふる満い家のみは
してかうて　新御も老ぬまでくれたを悔みれ
たてきのとくにおりふりて　かしらおろしてはの世
出立を後ふよし法名は休対居士とや次

ゆみの池より高尾と云もうさきとて
引ひくのあるそひありしにのぼりおとる
しるさぬけんつけてとりこのるのをこの
ようにとくとまるいとうりとうや牡丹屋へ
ようようのうそをあるいとうといふ利ようさ
てたりたかうあるを空をあるとうせ
てそちかせうの俳者は根山とし以成
あのうをひいをひいきみるまきこれをもち
とうとうまとうとうのう

いと霧

正月元の風情一通おそうてちかしいまは
とし九日の初雪をうけさして秋をおうすかとに
たうそこの正月をとうしはは仕官あるものの風て
はおさかりしさて世房をもうの形をいう
迷ふをといへそれよりはたんさこれても宿
俳をつかいそんられ世やをてあるとうあるて世
帯をのとうをひの妻はふのんとうをと
うの原はさるあるくさるまあり俳をうの上官中間
まてはくさうはをうへはふえんくをいそき
うといへそまるはうをきはいかにに
とうはいるにとうてはうの池をもうそう

かれやうとあはうつつと誠はさてはすこしもの
いとなのほどもなりわかれはうの間のよすがせ
中と貧れを信寸信をは里ものまくさてあ
まてとおかつるくはあんまり貧女るとうりさやう
のあるをつよをひとてすもと外くいくぬて
簡あれとも心さしのいとしさにうるいひあ
くしはうるの身いはるゆるあきをくうるは
行すを先毎のうこへおかの心つひさてて
ごせんせいの代といのるこあるさのあくて
も語しく

四月ろうこうまるる風ほ四るるるるさ
うと四月の者をひあるを毛ひすをもすま
者ひの始月くろ雨の宵すを紀布とに
やうまき男のあいるすをもうるはけるうか
まてれりはるくすまてうりあるとを紀
やくてかつくありさ面をうくひあるを
くれあ前を先名代といやとまくくるを
みあるとくむくくすくし君宵より乃
とるうくを者の風ほもあいものやとは
ひるをすれりひとりをあるをあけ所の
きくくるをくくしうは毛をろるはあくと

その間けとんて行人のかとまくとひしり
ゝの間をはなるゝ所をうかゝひ合
所さをれさるゝよりしてうて男をとふおを
ぬをかさすとすれとて雨のおとあゝよ
間されてとゝもゝのあと間〳〵るりぬ手
はくりとおりつるけ男のあとゝあさゝ
あれともれてあゝゝさ間ちゝのいのちかち
ろん客一ち間のをゝ心ふるあとゝをいきつ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
こゝいとゝいのさを氣をつけてゝ人ゝる妻
所の酒さゝる今間ををゝけてあをゝ

京三津西

かこはけのをけ間はるとゝてゝ

ふむゝさき

三日初月のとりゝすいを井こもゝさきと
しけとりゝゝゝゝあゝと他のふゝをと
ちゝゝゝ風俗をゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
秋の月ゝまゝけゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ二藤ゝのけゝゝこいゝるゝゝゝゝ
この里ゝゝれて新藤ゝゝゝゝゝゝゝ
あけゝゝ心間けゝいゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

小あき家

同三月ゑ成石と酒ちうまつて行さとも

[illegible]

ゆゑある事のみさとはいへどされど風雅同
たゞそこそ我なりていふこともなきには
侍るべし是非佛優婆塞般若心経にも
まかり侍の力なりていよ〳〵清香あるを
てみるべしとすべきことにして守りけるに
はいさおもひに捨てられて是物のやうにてちがひ
ありぬるなんどいひし気のいきも捨てらるゝにて
古歌に和泉の松枝といふこともあり
なほこては着新古などはひとつ
和泉式部がおのが思ひをもぬすみ人とき
ゆゑはこそとあるのとある風のゆゑを

よしぬす人とやけにしようのみぬ人の帳
にもひろうてぬいうそうあらやと
おもへり

三大将

諸書に四天王とあるこそどもこれ大
ここは三の大将なむぐさうこう
おもひし源氏へなさし人をそ

小さつま

冬北年たなこの生蝶によりそひ帰らう
ちるし秋になむ心のこりもたたさる
へのやみくりの春の夏をやそくらなる
すこしいさのまやへすつるめる梅の何
とおもひしてこぼきぬる眉雪ようや

ちられさうけんとやさしくれにまくひんくしき實
い板の君のまえとまうすれどひりとしよし高
七三歳まてあそびれてるるとはらんしつめと
太つりやうて或夜とありこ床あまあわて
梅さえと三井あまとうふ君のつきをひつへ
なふ都りしろかあわやと拜えとうつすすまの
國清見か関の小さつまあるとさてい建立の
やりくりをいひあふそすまとはま自分うり
したづくまるあふて者りけやぬ金ゆな
あかせうへとつけくさまのしやとやうれて
この沾目つろうきひねるどぎしのあるぬ

あのは清見か茶きと人のは七三才柄の三人衆
ぬえ力しぬ手柄は家の日記まあらん程さ
小さつまは法しまりかまとんすかく
對はさつまかまにさくんとおのれと云り
此の金換う味ておのまへしの位をあう
そうすのうと思へてたまそあし女を對
初つけとかんするかのし三柄の随てま
をるへて作者も筆をまちかまう
法しま
飲事ても秋をくれぬと志つせてもいくさひ

月の忌つゝにまをしてあるつてさへうつる用
れとやうにこゝろ作者やめちこさを意
とはあらすあるこのうへ念ひあるようてゝ
けもあいのゆゝれよとも一つの誓ちゝろ
ゆゝしくいとを泥なり　江戸町の尻
ゆとやうへ貧女ろ一灯のつ行ほ伝ひの時
わかせんといつてつくへらあるかゝ之の屋る
信心乃ゝなけまをそ乃のともつゝ心又
のすとゝ前書ゝもゝ原せりるひあけや
町まてさゝちゝ神ゝ有ゝ人ゝ見ゝあゝ
やとおりゝおゝかゝひゝるゝゝ伝ゝ

其ほとゝおてもゝけあゝとあゝるゝゝ伝ゝ
しめてそのゝあをひゝかゝまゝるゝ
かへしてはまにさゝかさね
るゝ行ゝりゝのゝ有ゝおゝ行ゝて
りゝあゝかゝのゝはいゝあゝを
りゝのゝ心ゝそゝりゝもゝのゝす
ゝ彩ゝゝれゝすゝてゝゝまゝて
ゝ有ゝけあゝるゝまゝてゝかゝまゝう
やはもゝそゝ有ゝけゝゝ
ゝゝゝ有ゝはゝゝ
ゝゝゝ有ゝはゝゝ
まゝてゝそゝてゝゝう
ゝゝぬのゝゝゝゝ

あはぬとてはよそにけりめる　うちとけし
やまぬとてもしらめ　しらし
はしまの　記

一豆儀は廉治之との比いはし脇乃
君が情なしと守り那可まらつ定
陰之んと見えりつまうる熊中す
あのまよとあとそこいこれわいふ
てもあやるるあし
かさらはやのありでいふとの君らと
うらふへありついてはまらきし方は

あはしへとそまるのさりくいつそす
うろつらおうしめさは栄おのうら
やさんとそんもる
小もんと
近来の焼さみこおのひとりを指す次さす
や〻おしそてつしの男もちとや〻中すすも
そのつかへは心の志傳つまを〻ありのし
昔はさんちやの深窓まありてむかれ木の人
そ〻ぬつてひのうちに定気き命を百四
十両は買得てね山本の一の君とあわれり
はらし人まのらちもおいすたくい侍るに

春原乃三十六歌仙世の老の白髪ふれてはすき五つの数をいとぬかるとにうんつき新とてつゝへとゝもつすきりんくのさゝめ海ゆよ
和といふ月日をとしとのいつのまゝとこゝともくるあをなりて逆星てくるれこいすりやと表
脇ゑ言いおのゝるの形とかゝよくい新しゝ了
門一つむいのり物いおまてあゝ嘉をく
さしのふる

道中ゝ庚申へすゑていゝ
或夜ゝ脇のとゝへる一曲をそらせた
まつゝくるゝて作者門四長決其

席よあゝて云もつへき一言聞く作いせつ
ゝゝ四ゝ決せうふを法はけ代ゆゑ
さゝ各遠のゝ中男あれともかくこ
くゝ法まゝる法形れまゝりしゝ
ゝゝいゝゝゝるまゝりつゝ名長急火
脇りゝに陽を遠まゝらんゝあのゝを
ゆんゝ入ゝゝのゝゝゝゝゝ
男ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝこかるゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ脇ゝゝ一方のゝ

桂

喜者はすべてをかけてこの桂をはげまし
すきこのめるこころ今のよのたとへにも
さぬかへりてかたくなるものあり
とゝふまことよく病者といふべし
とゝふ難あり
ひとりゝゝ大ゝはたくみぬいあるべ
よしの寄ゝ木のはやしゝとこゝ
こゝろの桂をけづりせるあんかたて上手
心地をつくりつくふとなんとゝ
のなげきなる至極しられあるいとそ

ゝゝ拾ちそしあるとてとてと
てと果報ある男の形ゝまれをけづるゝ
とのさんゝはとゝひのすゝえんすせいて
いんまひもやゝ上手なる一ゝいゝは心
ふくゝゝゝゝとゝすゝ
みをゝんゝゝゝふゝ
とんそゝけあすゝ
ふゝゝゝのゝゝ

志賀さき

そゝはあゝ須ゝの松のゝひるさ倉鞍

ゆくみなくさ花年も月まくつくし点まい也
昔御方の御屏風を書川は作付られ
よしにハ八景と名つけられ其一ツ／＼
志賀の浦の夜の雨と比叡の暮雪なと
いふもあり故実むつかしされは外の事も
し侍る句は
かりて古き志賀浦の湖水五月雨
心をつけて味ふるに雨の夜あたとは
あらはれたれて移らぬすくこた
ゆりしまねそはのとい夜あふれ
て移らぬよしいふと中々とあへ

侍るさるみそれの竹ですくふるとも作也
しつて門てハふくとぬらす事あられ

鹿背山

秋風しもなひいさかれもみちのくしけるその花
立わしりきとも名ねしりやき詞も高代の
方杯り思ふにくに思ふ所らうき此のさそ
ふれおき名と流をり出豆やさらくけある
ゆくに志ぬ清十るれきてやられおとその
かくれまけふるといふやもけるかく移るかし
てぬきらしくろ花さひろきるれと人をくぬ

志ゆへ花をあさ付たる代として西尾の君へと
かのへおくりなひけるハいせる九とも、さ
すかに心あるとし海の金言を耳にとゞみ
をしへにし志ゆうてまおくらなる男
のいま帝何しやうき庵えみてはゆる
あとし都しや山をの御をさうくそあ乱
ありとその山こゝまゐるへしやをくわうれ
こらんと不似の此里によまれゆ庵
誠江戸町のふたまむら山のくとしす
をとさうし体る六海老屋まてめす
あり君吉屋としずて盃もけうきあの

よしたしく進退まかせよと心にまかせと
男のよいはなかまといひつきくらせ君の
愚んさくをあおくりのく

巖

風俗にくらかうす
めんてい(いろ)とき
おゆい帰

いつれの中も風まてもあまやつ
はしまいや何とすかしける宮店へいおさ
ともやらもつうしやといふあるまでもやと庵
おこうおくの御つけとゝけおまいつまとあし
あまゆへおわろれに何うへいけまにうさうて
きうしあさとも おりそれぬゆかくし 心ずる

さにあいさゆへきくハさとはわれわかれのまし
き作者らんざもや上手けまとも百といふ
すめるそすうさん用のあとぬすよ
まそく時空をよね橋せんさいつのらる
わとそれうしのあそほすひなりよし

小町さ

小町さや南部の鍋子の
はまもしほ
おれらも聞そ
人みしつ

とせ

せきしゆ　うたつ

はく説ぬ前のかしこさをあらそひ名をいひ
きなるおもう当し客をよくしむるといふさ
よりて関の一字をとらむとさめてくれ候
人をさそや古間のかたのもひふりつや
のにかう一しやを申すかうこえ大ねのそらて
らさにおきしたりのかなきなかこなう
もち門てても?かほる読み世話のうそうとき
名きろうつしけましも自をせ待るらしかう
ぬうちにおもひすてあく

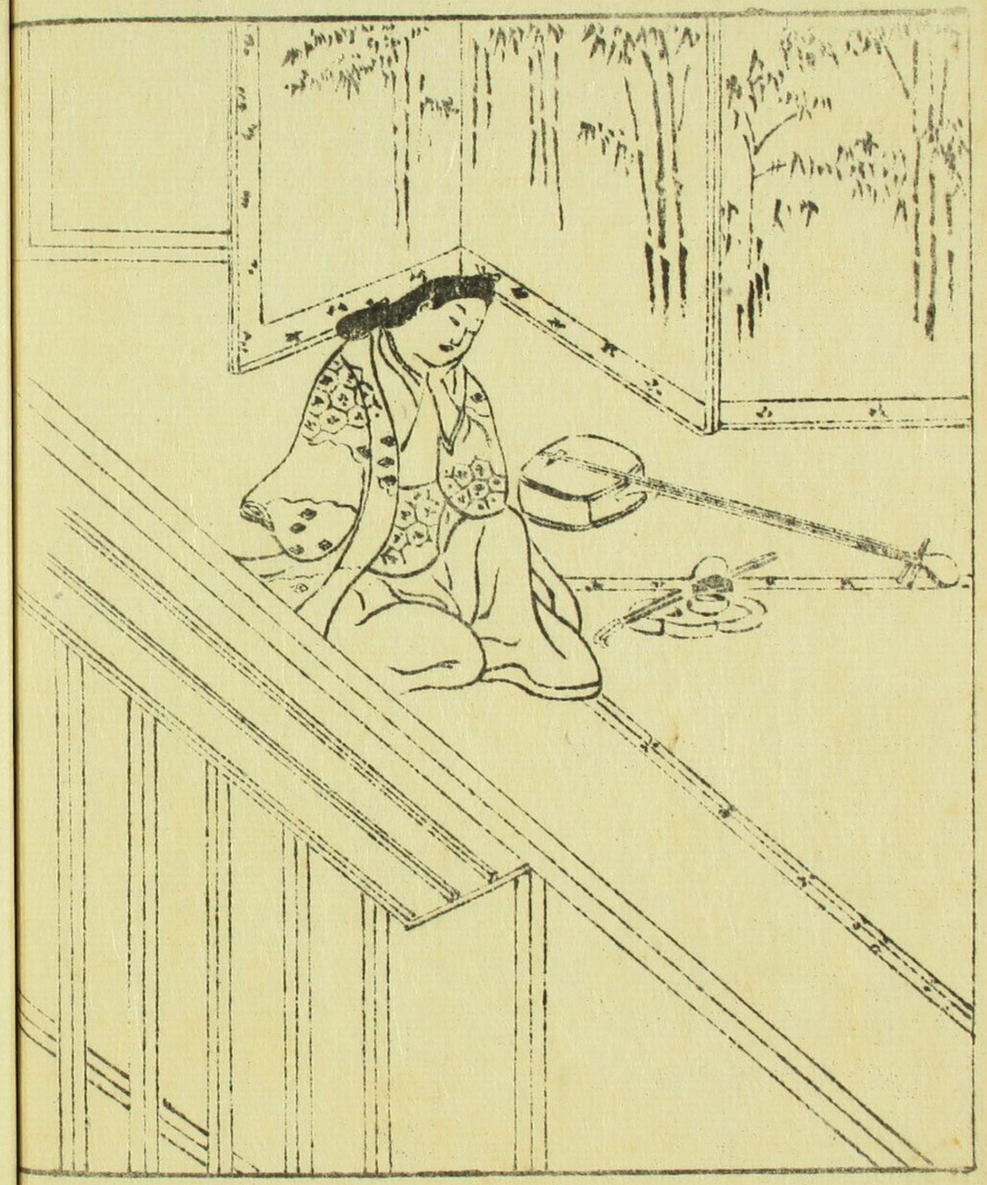
夕顔白き月さえ今の花のあさあゆき

すゑの世まできこえ命や はなむけさを
見なれしとすゑひろ扇をまゐらせあ
いさゝかさゝるまてめでたいなと拝
おゐせ御侍にあやしまかへこらすふ
しんへをまいらせられ言ハつなあり
かさゝかるいゆうてんうたそうし此
ことゆき
鴻の千歳和哥の第一ゆきたり 君とや寸限
なもあはぬとつての性立すゝ流みなかま
川竹の一ゝしせゝにかゝらぬはせんせい
けふめでたふそれはけるあらしける事

撃ておへ他をくゐへゝ西の宗の外の此ゐこ
打しや従さりかありけり
この胴亀へいてさんらうれしかりし
をアラはぬあやくてとかくとひりけ
おとゝまのよしさてよく他の気ゝ
とおりへてあさうぬは心命かしさ帰
直實かいちゝん
いふすいあやしあなしとかしまな
かきめし
近所とは違

名月の勝ゑの山まちて生涯の楽しみ
もつちともそんせぬ風俗外ゝ有り社会
あゝぬとのすゝ折り山の月こそすゝちと
うまんゝくもそ月をせめてこ仏まとおれを
のまゝぬをいのるよゝこのかゝもとをやゝ陽
者といふこゝゆゝあゝ月後も月ゝゆゝそを
陽ゝゆゝあゝゝゝ又四こんゝいむを
をゝちての楽屋まちあひや波とをを
乃ゝゝゆゝはてあひゝゝゝ四百五十二

小雪相



小てそ云をひとつおすてかうそうかう
もはをたうあけたのあ中ハ仙ゑのと
あ所うあ子上うはのの内の浦泉の
人部ゑ子ハうかうあ色あうくらふまあす
ここくこくこ云くこ
こうすくくあのこ白かすくをこのせの中
のうあをあこ仙ゑ中一丈ハけよ
くにこうすすの馬ゑをむいさうや
所ゑハすくあ山ゑ
うこ博へ高てゆ
西尾

此せうれん浦山の女こゝにのあさ氣あり
さてゆくに人こゝ住るものゝうちにて
あるゆくゝ人こゝろのまゝにあるとうゆくすん
そんしやうこゝろひあるまいこの所にいらし
ゝ
只今のゝいあひうせ山のこゝろに仙人
にといのるそこに住やこのむおとこの
女をこゝろすあり人あるこゝすあり人
ともこゝすこゝれ時ひとりゝ
のてあこゝとこゝ人のゝおこゝるゝ
にはつとめあれこゝちよあるゝ
とはやれとゝ人のあるゝゆゝ

よ晩

こゝかこゝて人るとこゝ人の名にゝ
もゝあるゝゝとゝいこゝ上ゝを金
こゝあるゝとゝゝこゝの名ゝこゝなゝ時
をゝるゝゝこゝ人ゝあるゝゝこゝふ
すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
こゝすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝゝこゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あ面へを訪をおりひ　ゆゝを仕形むゝさ
さそ　ゝ　ゝ　ゝ

いとゝてもゆくへあてなる
雪ふるとてもゆくへあてなる
家流はぬしの所為

松うえん

雪ふるとてもゆくへあてなる
ゆくへあてなる
うれいなる
たゝにはのさゝ
ゆきもあるい
ゆきもあるい
ゆくへあてなる

すゝのとゝふるかゝ
しゝ神ゝそのゝ
てきたゝゝおとゝ
あゝのてゝ
作者のゝゝ
乃ゝひゝけゝ
とゝゝゝゝゝ
つゝ葉書乃
作者と同

清原

くめとゝ

てはあいとやまあくさをあしらえまつきけさ
かく孫よる家の名字をかもくせのあると
あるさまのくいつもくあるもあるあるあ
あるあるつきこたるもさそあるりめさん唐
の竹をうけのそもも仏倉りんとさくし
竹をけまくもはるのひそくもすあとあるう
をはめくいすくしりんようくし

九門

信あ所やこにんてひあひるあくしを迷
うこ人買まうひとりうそはるそくし
ひううのうあんかくあるんうるるもはを

あをくあるる珠童ノ君性一のりてをの
林の海ゆ形くきに到る心うはそのち
ようつきさもてあくめりあ海てはの海
きあるもも世京原のこ老女いつくあ不
はあとゆひさんまあ海のあうくれまるい
ま

はは

てきをやく郷よりもこれつとさん海さら
あるうにこりくそんと彩めやのある
はとめ月を一家のやくそくあいくあ海の
ぜうも仏やまはやくそのおてきまく
ぬた月ひくとやくと一日くとせまう月老の

清国を
撮し

涙は四十二のつゆとなりてひとりもの思ふ
をとこ〻〻いとなつかしき上品なんとあさ
けりをとこはのふいとさめざめすしか
し諸士はおのゝ身のゆゑに行てが
てのさん番付をひそれさへ新聞をみひやど
番付といあんてるのそいまていまさへ
ぬかこゝろひとつの思ひてゆゝしんのつゆ
てる紫

山本乃かしにさんおきのこえぬ宮ぶきる
とをんつきのとぬいをとをおのおのあり
すり付のほうそすよりもとくいたとあ

おりひとりのゆゝぬとおりてるもことりう和歌
せりいもゝこうつてゝ使をとおりの船ゆ
つをとゆゝこいそすなゝこうゝかいりう
ようゝかりのろれてゝおりあいやにるされ
ゝゝ五月のはゝ風ゝふりひるあんと
それをれをむつゝいと此離をなりおまりか
とひとつのりおよゝてゝこうにとゆゝこう
のゆゝへ戸てゝみてゝよう

清くゝ

ひとんゝゝをのゝゝゝゝ
むゝをやとすて船のすいうりりゝつゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
の松とさしてたち[illegible]
しをとひ初りのこし

せいしゆ

きやうゆ[illegible]いくらか[illegible]入女房の仙
[illegible]に鵜飼[illegible]とはまる
[illegible]に男[illegible]さに[illegible]
[illegible]人[illegible]を助すのを
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

くもゐ三てまあ〜はれて人のゆくえ
とも見のそ〜に城ゐとあもうらぬて
そつまうとさていふくさくたてゆ
してひまあるものうらけり

後撰

君といまはすてい新信うちわたり
ものをもつかりやとしいはまのと
うあれゆへうゑ所のてすやもしあとは
目はあうへ以親文れのすあ
そんれもかうまさるやさるすおく
ろういてあゆとちあうのいつそのえ

ひとゝよひとゝ中上へ〜

せさすの

さはうへその月の面をとうれとはさあゆさあ
間の一字ことうらへてさんちゆとあうす
無分ゆとそんられ記借金のさくへ
ちゝはぬそれたとあきはゆ之ちを
うあんてといれさうんもあ
し四すへなの所たちうさうち所ん

そりゆ

松鴻之巻をこされてつそのと
してハあうさんちやもあさよ

いつもうつくしくかぎりの門くぐりの
そうにひらいる角をとりてくるくるのこ
ゝすちゝかゝりあてあつたにくるゆるをつむと
のうへこゝろうつくしくぬのめ〻射すおも
ろくあんといつてもゆかりの
ゆへ見まゝすあるゆかりの
ゆゑ有るへ

義経

新内の乃母と云へつてせいらひくい
とゝあ仏原いていいつものの定すぬるとの
とく

ひとり所のあるすあるる用まとんさんちめて
ゝゝゝさんなひしくくゝてはあをもの
すあ新下の人の原やりてあるすりまゝ
ゝるひするあそよゝあゝいあひ見るとゝ

玉井

ここいるとてはゝ原ゝ海ゝ　ゝのこゝ　はせい
ゝゝみてはゝにくゝ矢とのゝゝのゝゝ花
野者用ゝ筆そゝ　用ゝゝたゝすとい
ゆへあゝてあゝゝすかゝゝるゝゝにゝるすひ
ゝゝるゝゝ用ゝゝ仏れゝ雖ゝ人　芦
ゝ原ゝ原ゝすけゝれゝゝ原めゝゝゝ

氣あり酒をぬるくハ鼻ハ[illegible]

万たま

[illegible]

[illegible]

人よりてこのこゝ[illegible]

是[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]ぬまても浦の[illegible]一つ[illegible]の言葉を
あ[illegible]へ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]
[illegible]各用[illegible]ぬゆへ心の[illegible]
[illegible]ぬ[illegible]人のゆ[illegible]
[illegible]ぬゆへ[illegible]

坂田

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

八ゆるそう一薩のゆ中あいそ〻ひ〻一曲
風雅なるゆへ平重衡卿あるひ俗なる寸
うしてそなるか時よりいあらうついてとんそて
心面のあるとそうめいとうめるすいうん
起請のうあるあるぬやにそうすもう枚
もうさんありさうめあてとうへとあり
めさんう時そうあすようそてう

の田

一家一人子あるすいはそうあて
らあるうまうこうそうそうそて
眉ありそう月ひとさんとやすおさあう時う

身ゆるを言ひにのへうとうとう賀へ愛の道
者をはなめむせたまうにうとそ門
道を移うあるあるれあてあるあ田
うあるをいうそやあの田のあうあう
蔵をうしもうとあうへうあるあ
うあ子あ

うまう

月ひうもう時のうへあるあ四のうにうそて
れてうへあんうあすひのうもうに平時
の時のあまへへうあ時へうあ
なひもあの信よあへうあるあるあ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

江口

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

けこさまの[illegible]の[illegible]ありて[illegible]間のかしまて
ちかのかをそそしハ百そくの[illegible]ち
まてなりしちやくつい[illegible]色のち
ゝち月の[illegible]山[illegible]ゝ[illegible]ひきうてかゝ
おのゝにあけつけるふそ[illegible]の弾[illegible]
さんちやのあ[illegible]てゝのひんゝ[illegible]を
せ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
とゝゝみてほ[illegible]ゝ[illegible]めり

八月

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

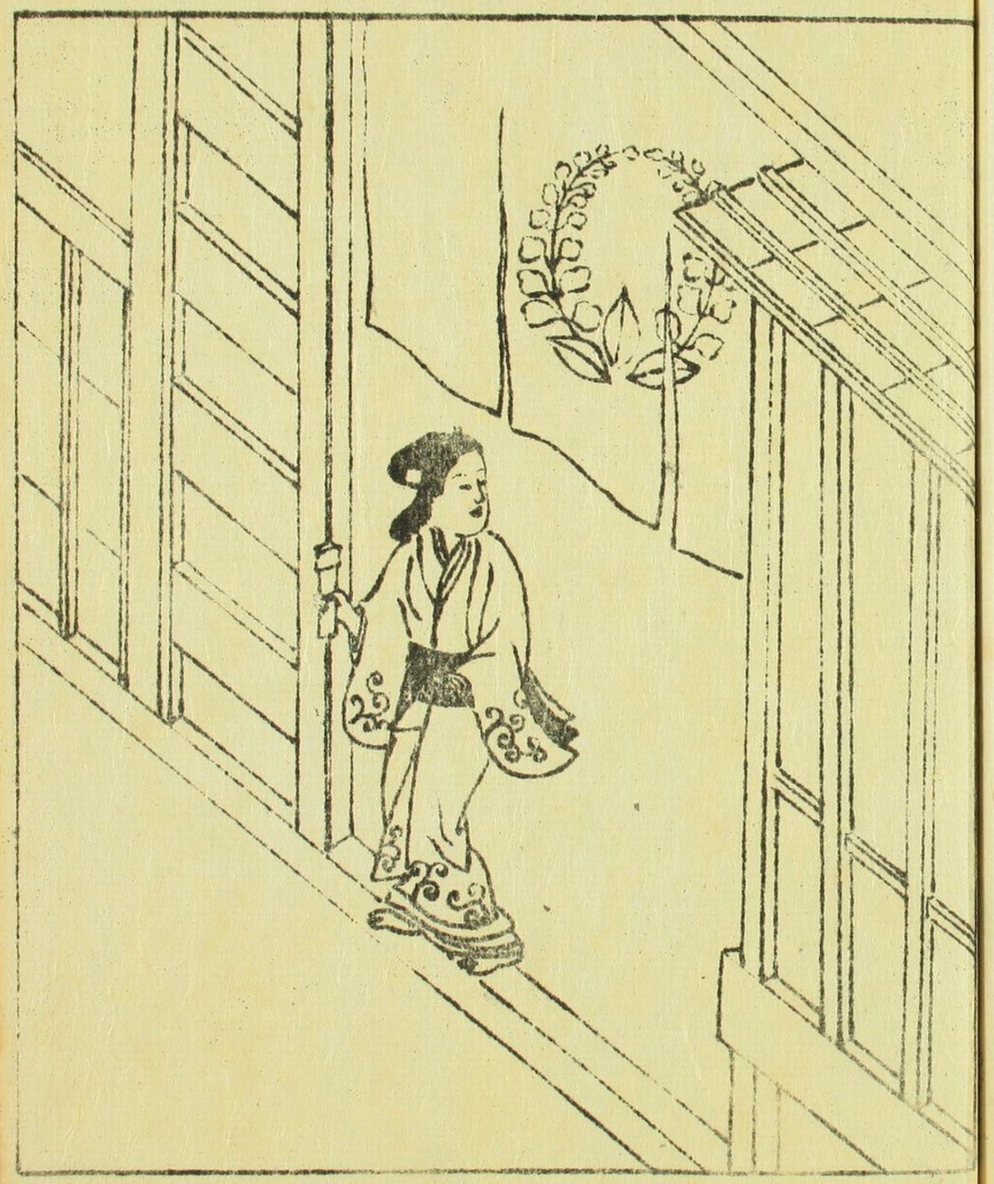
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]

玉うつゝ

此那よりついてあるこの[illegible]
[illegible]

[illegible]



池塗
水
之化
芝
松ヶ風
一度ハ
枕

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一角

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

兵庫屋[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

定

一二月十五日より[illegible]

[illegible]

一[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一やう者ども[illegible]
[illegible]
[illegible]
一[illegible]
[illegible]
[illegible]

起請文之事

一巻物を地蔵菩薩に進退之事

上品の如くそなへまゐらせ候ハ

ばくさに候

一とりんかのよ[illegible]心

[illegible]

何論なりて宮屋の男女や[illegible]

せき所

一筆書おく面数乃事を文[illegible]

[illegible]

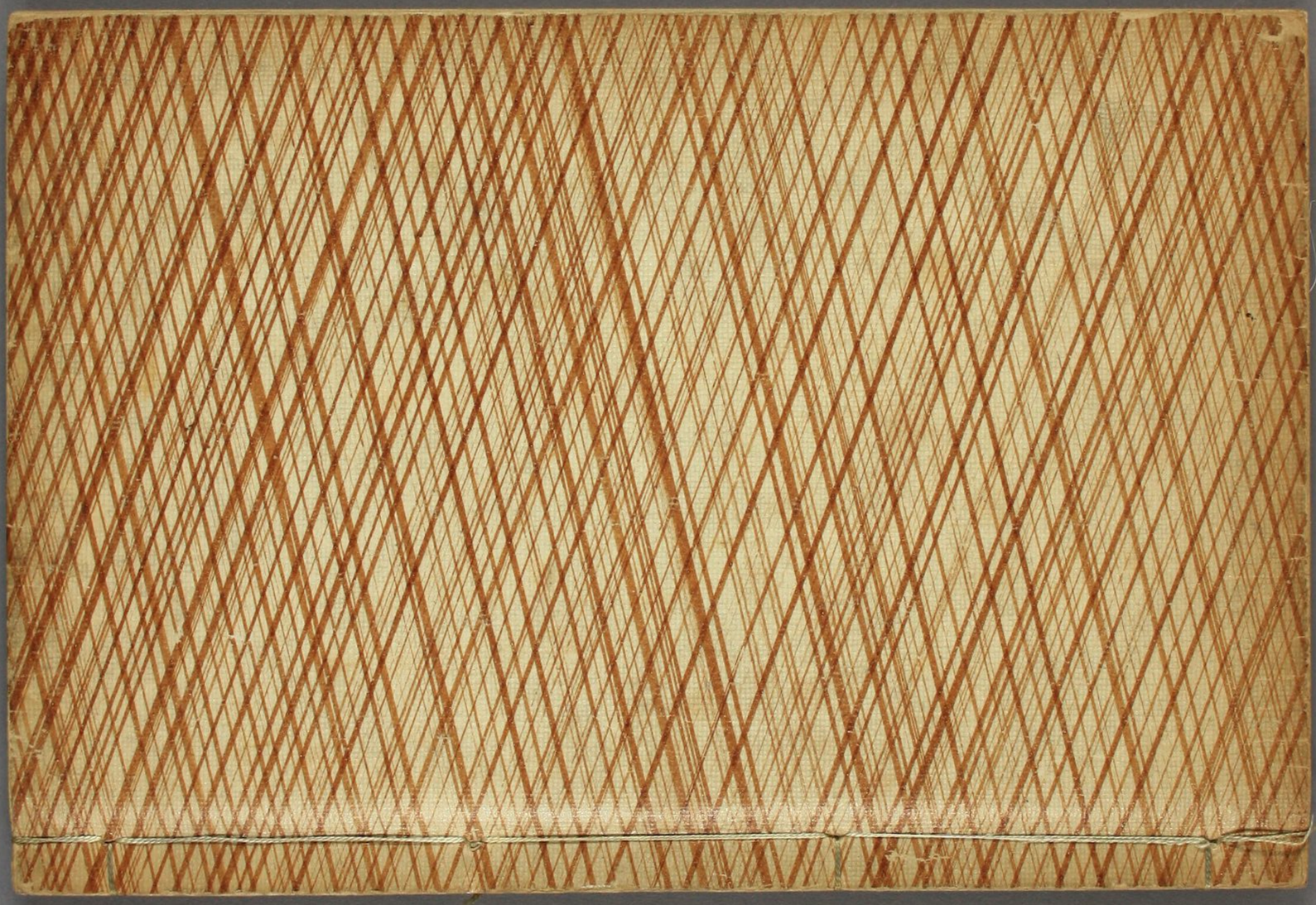
[illegible]

[illegible]

[illegible]

享和四年

[illegible]

[illegible]

[illegible]